

日本は  
ものづくりで  
勝てないのか!?

## 第8回

# 戦後のものづくりへの思い

### 大学と学会そして産業界の強い思い

明治維新に匹敵する波乱の時代が戦後の昭和二十～三十年代である。欧米に追い付こうとした明治以降の富国強兵策が脆くも破綻し、太平洋戦争で日本の多くが焦土と化してみじめの敗戦となった。この焼け跡から昭和二十六(1951)年、「第1回塑性加工研究会(世話人・鈴木弘<sup>(1)</sup>)」が日本機械学会内に発足し、その後昭和三十六(1961)年「日本塑性加工学会」へと発展し、現在に至っている。

昭和五十六(1981)年、昭和天皇からお茶のお招きを受けた席上で、福井伸二<sup>(2)</sup>は日本の金属加工の発展の“思い”を次のように語っている。「私は昭和七(1932)年から金属板を素材料とする基礎研究を故大河内正敏博士のもとで始めることができました。戦後になりますと民生用の応用が盛んになり、特に自動車のボディが大きな目標の一つとなりましたが、『ボディに使う薄鋼板を造るなどは不可能、加工技術は米国に絶対かなわぬ』との意見が大勢でございました。昭和三五(1960)年以降の進歩はご承知の通りで、瞬間に世界一に達しました。もう一つは冷間鍛造を、昭和二十五(1950)年頃から多くの協同研究者と基礎研究に努め、その成果は三十年頃から自転車業界、三十五年頃から自動車業界にも取り入れられて行きました。その後の進展は、実は私も予想しえなかった次第でございます」と。話が終わってから、陛下は「素材料がよいと言うことだね」と尋ねられ、福井は「今回、陛下に素材料がよいとのご認識を頂いたのは誠にありがたいこと」と感想を述べている。

### 鉄鋼産業の飛躍

西山弥太郎(図1)は明治二十六(1893)年に生まれ、昭和四十一(1966)年に川崎製鉄(現・JFE スチール)会長在任中に73歳で死去した。尋常高等小学校卒業後、横浜の根岸で叔父が営む金物店に働きに出た。そこで鉄の大きな需要を目の当たりにし、猛勉強して第一高等学校・東京帝国大学工学部冶金学科に進学した。その時すでに西山は23歳となっていた。指導教授は文化勲章受章者の俄国一であった。学生時代に田中鉦山の釜石鉦業所、官営八幡製鐵所、(株)川崎造船所の葺合工場で実習後、同社に入社した。戦前は川崎造船所、川崎重工・製鋳工場(神

戸市)の工場長などを歴任した。空襲で木造の事務所棟などが焼失した際製鉄所長の西山は「鉄屋が鉄をつくるのに事務所なんか要るか!現場の隅に机ひとつもあれば十分だ。工場の機械類はひとつもやられていない。人と電気系統と燃料さえあれば今すぐにでも操業できる」と従業員を鼓舞した。昭和二十五(1950)年、鉄鋼部門を分離独立し川崎製鉄を設立し初代社長に就任した。そこで、西山は資本金5億円の会社でありながら163億円もの巨費を投じて戦後初の臨海製鉄所を千葉市に建設する計画を発表した。世間の多くはその計画を批判した。当時の鉄鋼業界は八幡・富士・日本鋼管の高炉三社が大きな力を持ち、川崎製鉄・住友金属・神戸製鋼の平炉三社を見下していた。その粗鋼シェアは八幡(30.3%)・富士(17.9%)・日本鋼管(13.6%)であった。一方、川鉄は9%とかなりの差がある。批判の急先鋒は高炉メーカー三社とそれに連なる通産官僚だった。また、ドッジ・ライン(引締め政策)の影響下にある金融界も「西山は白昼夢を見ている」と否定的だった。その後の数多くの苦難を経て昭和二十八(1953)年に西山の「思い」が実り千葉製鉄所の1号高炉の火入れに至った。この英断が多くの企業による果敢な設備投資を促し、高度経済成長を各社に促す起爆剤になった<sup>(3)</sup>。

日向方齊(図2)は明治三十九(1906)年に山梨県で生誕し、平成五(1993)年に86歳で死去した。生家は極貧であったが、篤志家(森家、日向の妻は森家の長女である)の援助と奨学金にて旧制東京高校を経て、東京帝国大学法学部を卒業し、住友合資会社に入社した。住友金属工業(現・日本製鉄)は、住友伸銅場・住友鋳鋼場からスタートし、軍需ブームに乗り終戦直前には19工場、従業員8万5千人を擁する大企業となっていた。終戦後は一転し、大阪・尼崎など4工場に集約、従業員を1万5千人に縮小し15工場を切り捨てるという大手筋に企画課長として携わった。昭和二十八(1953)年に小倉製鋼を合併し、住金は高炉メーカーへと脱皮を図った。昭和三十二(1957)年に和歌山製鉄所に高炉を設けて銑鋼一貫体制化を果たし、後発メーカーながらも世界有数の高炉製鉄会社に育てあげた。昭和四十(1965)年、通産省は産業政策の一環として一律の粗鋼減産を指示した。日向社長はこれでは過去の市場占

有率ベースで固定され、住金は実質的に不利になるとして猛反対した。世間はお上に楯突く「住金事件」として注目した。通産省は原料炭輸入の外貨割り当て削減などで報復したが、財界のみならず世間一般からも日向の反骨魂に対し拍手が送られ、その後自由競争への日向の「思い」が実り、昭和四十三(1968)年、新鋭の鹿島製鉄所の建設に着手するに至った。日向は西山に住金と川鉄の合併を持ち掛けたが、破談に終わったとの話もある<sup>(3)</sup>。もし、合併していたら、鉄鋼業界も今とは違った景色になっていたかもしれない。同年、筆者らの住金入社式で挨拶された日向社長の一言、「初めての給料の一部は、今まで育てて頂いたご両親に感謝を込めてお渡ししましょう」は今でも忘れられない。

川鉄、住金の話題とともに、高度成長期に新日鐵(現・日本製鉄)が果たした役割についても述べたい。昭和五十二(1977)年、新日鐵の稲山嘉寛会長が訪中した際に李先念副主席から上海宝山鋼鉄総廠(上海宝山钢铁总厂)建設協力が話題にあがった。翌年に文革で荒廃した中国経済を立て直すため開放路線へと舵を切った鄧小平副総理が、新日鐵君津製鉄所を視察した際に、最新鋭の製鉄技術に感銘し、技術協力を強く要請した。さっそく新日鐵は中国技術者1000名の日本への受入れ、日本から技術者320名を含む延べ8000人を派遣、全社挙げて支援し7年余の苦節の末にやっと完成した。宝山製鉄所建設(図3)を舞台とした山崎豊子氏の長編小説『大地の子』<sup>(4)</sup>がテレビ放映され馴染み深い方も多いと思う。現在では「中国最大の製鉄所」として多くの子会社を抱える大企業「宝鋼集団」に成長した。



図1 西山弥太郎 図2 日向斉 図3 宝山製鉄所建設(旧川崎製鉄、旧住友金属、旧新日鐵より提供)

## 自動車産業の発展

豊田喜一郎(図4)は明治二十七(1894)年に豊田佐吉の長男として生まれ、昭和二十七(1952)年に58歳で死去した。豊田喜一郎をモデルにしたドラマ『リーダーズ』が、テレビ放映された。豊田喜一郎には「いつかは国産の自動車を造りたい」との強い「思い」があり、父の豊田自動織機製作所内に個人研究所を設け、昭和五(1930)年に4馬力の小型エンジンを開発した。昭和八(1933)年、彼が33歳のとき自動車部を開設した。そして試作工場と製鋼所を設け、昭和十五(1940)年、豊田製鋼(株)とした。現在の愛知製鋼(株)の誕生である。その間、現・豊田市に58万坪の大衆乗用車の量産工



図4 豊田喜一郎<sup>(5)</sup>

場用敷地の買収、昭和十二(1937)年に自動車部がトヨタ自動車工業(株)(トヨタ自工)として自動織機製作所から独立した。自動車はその機構・製造方法だけでなく『材料と部品』が大切との豊田喜一郎の「思い」が功を奏し、その後世界をリードする企業に発展した。

本田宗一郎(図5)は明治三十九(1906)年に生まれ、平成三(1991)年に85歳で死去した。彼の本格的スタートは2輪車である。ホンダカブF型(図6)は昭和二十七(1952)年に発売され、自転車後輪をドライブチェーンにより駆動する方式で、エンジンは2サイクル単気筒、排気量49.9cm<sup>3</sup>、最高出力1PS、アルミダイキャスト、プレス部品などを時代に先駆けて技術を積極的に取り入れた。その結果、多くの庶民から支持された歴史的な機械となった。さらに、本田は以前から四輪自動車も自分の手で造りたいとの強い「思い」があり、昭和三十六(1961)年、特定産業振興法をかざした通産省企業局長・佐橋滋と鋭く対立した。「ずばりお尋ねします。本田技研は四輪車を作るな、そうおっしゃるのですね」、「まあ、はっきり言ってしまえばそういうこと。アメリカのビッグスリーに対抗するには日本の自動車メーカーなど二、三社でいい。新規参入を許す意味も必要もない。ホンダは二輪車だけで企業を存続していけばよい」、「ふざけるなあっ!うちの株主でもないあんた方に、四輪車を作るなと指図されるいわれはない!」、「あなたはフォードやGMに勝つ自信がおりか?」、「あるに決まっているでしょう。俺がもし自動車で日の丸を揚げたときには、お前は切腹するぐらいの覚悟をしておけ!」と啖呵を切った。その後は、周知のように現在のHONDAの隆盛を導いた。このように、鉄鋼業界・自動車産業界は独自の「思い」と使命感で保守的な国策を突き破って、日本のものづくり産業を世界的地位まで築きあげた。自由経済を信奉するリーダーは斯くの如く戦ったのである。



図5 本田宗一郎<sup>(6)</sup> 図6 ホンダカブF型<sup>(7)</sup>

参考文献

- (1) 鈴木弘, 塑性と加工, 42-484(2001), pp.371-372.
- (2) 福井伸二, 塑性と加工, 23-252(1982), pp.14-15.
- (3) 黒木亮, 鉄のあけほの(2012), 毎日新聞社.
- (4) 山崎豊子, 大地の子(1994.1), 文春文庫.
- (5) 「豊田喜一郎」『ウィキペディア日本語版』, 2022 (2022年6月15日取得, <https://www.wiki/4Dhw>).
- (6) 「本田宗一郎」『ウィキペディア日本語版』, 2022 (2022年6月15日取得, <https://www.wiki/3apM>).
- (7) 「ホンダ・カブ」『ウィキペディア日本語版』, 2022 (2022年6月20日取得, <https://www.wiki/5KE6>).

<フェロー>  
浅川 基男

◎早稲田大学 名誉教授  
◎専門：機械工学、塑性加工、機械材料